

令和2年度（2020年度）洗堰上流の瀬田川における

チャネルキャットフィッシュの生息状況

石崎大介・田口貴史・根本守仁

1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加し、瀬田川洗堰（以下、洗堰）上流の瀬田川や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。琵琶湖への拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐためには、瀬田川とその周辺における生息状況を把握し、適切な駆除を行う必要がある。

2. 方法

2018年から2020年に洗堰上流の瀬田川で延縄調査を実施した。調査は2018年7～8月に5回、2019年3～12月に17回、2020年3～11月に14回実施した。幹縄約500mに60本の枝針（ハリス：ナイロン7号、針：ムツ針11号ないし14号）を備えた延縄を用いて1回の調査で針数240～360本を設置し、翌日引き上げた。エサは冷凍のアユを用いた。調査日ごとに採捕された本種の針100本あたりの個体数を算出し、CPUEとした。また、2019年4～11月に33回と2020年6～11月に13回、同水域で実施された滋賀県漁業協同組合連合会の延縄による本種の駆除データについても同様にCPUEを算出した。CPUEの月平均を求め、年ごとに比較した。

3. 結果

CPUEは、2019年は8月まで低い値を維持していたが、9月に大きく上昇した（図1）。9月には体長200mm程度の同水域で繁殖したと考えられる幼魚が大量に採捕されたためである。一方、2020年は7月にCPUEのピークを示し、9月以降はかなり低い値を維持した。このことは、2020年は幼魚の加入がなく繁殖抑制がされたと推定されるほか、続けて実施

された駆除事業の効果があったと考えられる。また、2019年は7月にはCPUEの上昇がみられなかったが、それ以外の年は7月に最も高い値を示した。洗堰の操作に関して、2019年は7月に洗堰の全開放流が実施されなかったが、それ以外の年は7月に全開放流が実施されている。洗堰の全開放流が実施されると、洗堰下流から上流への物理的障壁がなくなることから、生息数が多いと予想されている洗堰下流の瀬田川から本種が侵入する可能性があり、その影響が疑われる。今後も調査を継続して本種の採捕と洗堰の操作との関係を解析する必要がある。

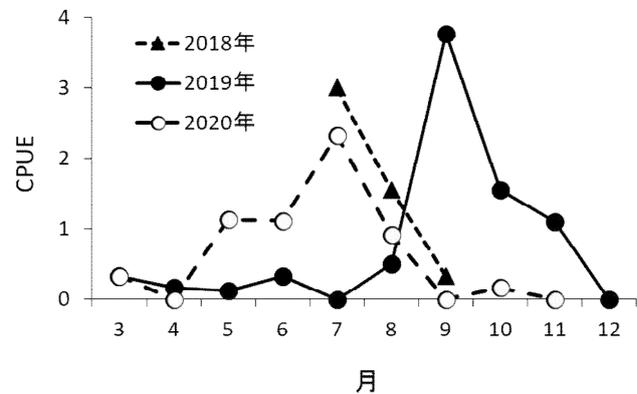


図1. CPUEの月変化